



福岡県JAみい管内

タキイ交配ミズナ

「都むすめ」みやこ

調製の作業効率が向上し、箱数が出る！

(編集部)



↑「都むすめ」は節間伸長によるばらけが少なく調製作業がスムーズ。



筑後川流域の田園都市

JAみいは北野町農協・小都市農協・大刀洗町農協が合併して発足した農業協同組合です。管内は福岡県の中央部、筑後北部農業地域の西部に位置し、筑後川流域の北部に展開する平坦地で、総面積は88.82km²の田園都市です。

地区内には経済および生活のための県道が管内を縦横に走り、九州横断自動車道が展開。福岡・久留米都市圏のベッドタウンとしての住宅用地などの造成が急速に進んでいます。

管内生産者久保田さん

管内で「都むすめ」を栽培するのは、サラダ用途でミズナがブレイクする前からハウスでの栽培に取り組む久保田一敏さんです。久保田さんはタキイ園芸専門学校を平成元年に卒業し、北野町に帰ってミズナを導入されました。就農当時はバセリをメインで栽培されていて、栽培が厳しい夏場のみコマツナに切り替えていたそうです。ミズナを栽培して2年ほどすると、



↑43cmの長さで袋の高さ一杯となる。



↑日中はしおれ防止に遮光が必要。ハウスの奥と手前で遮光率が違う。入れ替え時期は80%遮光から90%へ。

←写真は10月15日まきで20日を経過した「都むすめ」。冬は株間5cm、夏場は少し広げて6cmに。冬場は株間を狭めないで横に大きくなって上に伸びないため。生育中のミズナの葉先は太陽の方向に傾く。日差しに敏感。

ミズナのシャキシャキした食感を生かしたサラダ用途が拡大。久保田さんも10年前から本格的にミズナの周年栽培に切り替えて、ハウスを3000坪に増設されました。当時の品種は「千筋京水菜」。徒長しやすい年明けから春まきは伸びの遅い「晩生千筋京水菜」を現在も使われていますが、栽培的に難しい冬期と夏期の栽培に新品种の「都むすめ」を導入されています。

「都むすめ」の利点

J Aみいでは試作番号段階から先行して「都むすめ」が導入されています。ミズナ担当の営農部園芸課の木崎豊さんによると、管内のミズナ生産者は久保田さんを含め12名。管内の取扱額はコマツナやホウレンソウに次いで4億円程度を数えます。規模の大きい生産法人もありますが、中心は久保田さんのような中堅規模の家族経営が主体です。近年ミズナの価格は比較的安定しており、取材で訪問した2021年度はケース700〜800円と安値でしたが、10月に入って寒暖差が出てきてからは1400円台となり年末にかけて引き合いが増えています。

周年でミズナを栽培する部会では「都むすめ」の夏場の栽培性が評価されています。夏場にミズナ栽培で問題になるのは、鳥あしといわれる、株元が



↑ミズナは袋の高さでケースに縦詰めされる。

節間伸長し、ばらける現象です。こうなると収穫調整時、研修生がどこまで側枝をとっていいか判断に迷い、束にした荷姿も悪くなります。「都むすめ」は早生ですが節間伸長によるばらけが少なく、上葉がとりやすいため作業がはかどるという訳です。

久保田さんのハウスでも研修生が元気に収穫と袋詰めを行っています。彼女たちも「都むすめ」は袋詰めまで作業がスムーズに進むと笑顔。一袋150g入りでメインで長さは40cmくらいからとり始め、43cmを超えると袋からはみ出します。

「都むすめ」は早生のため、栽培は年内まで。前述のように年明けからは生育が早まるので株太りのよい晩生の「千筋京水菜」に変わります。例えば3月収穫の場合、冬場の生育に60日かかりますが3束で一袋が仕上がるので、坪当たり3ケースの計算となります。

夏場は「都むすめ」6束で1袋ですから坪当たり1・5ケースの計算ですが、1株が30日で仕上がります。このように夏場になると栽培は回転率重視に変わり、作業効率のよい「都むすめ」が本領を発揮することになります。

課題は夏場のフザリウム

課題は梅雨から夏場に毎年発生するフザリウム対策。耐病性を強力に発揮する品種はありません。収穫後の残渣の根を土中に残さず、土壤消毒など物理的、化学的防除は欠かせません。「ミズナの魅力は周年栽培が可能で回転が速いこと。この品種は11月15日に播種したものが年内の収穫に間に合います」という久保田さん。早くからミズナの優位性に目をつけられてハウスを増やしていく中で、労働力的にも作業効率のよい「都むすめ」で収益拡大を図られています。



↑久保田さんと笑顔が明るい研修生の皆さん。4人がかりで1日1棟の収穫ペース。